

第1回

「私の経験」

米国 エクセロン社 TMI 原子力発電所
エドワード・R・フレデリック

それは私も経験したことなのです。ずっと昔、私達全員が経験したことなのです。皆さんが今感じられている気持ちを私達も味わいました。苦い思いです。深い心の傷です。そして長い間消えることはありません。そう言えるのは、1979年のTMI 2号機の事故当時、私は制御室の運転員だったからです。

世界各地で開かれる会議の場で事故当時の話をするたびに、今でも心が乱れます。口ごもり、汗をかき、今まさにまた同じ事故が起こっているかのような気持ちになります。32年も経っているのに。

あの事故で発電所は損傷し、近隣住民は避難し、他の原子力発電所は運転停止になり、新規建設は中止となりました。私が失敗したせいで、私が信頼していた技術を一般の人達が恐れるようになってしまったかのように思いました。

各建屋の地下にたまった高濃度汚染水をどのようにして処理するかを学ばなければなりません。事故で発生した廃棄物を運搬し保管するため、ポンプ、タンク、フィルタ、配管などを新たに据え付けなければなりません。

毎日、悪いニュースが舞い込み、メディアの注目が高まり、批判は募り、政府や環境団体の調査が開始されました。6年もの間、さまざまな取り調べや聞き取り調査、法廷、供述聴取に出席しました。何十という調査が行われ、それぞれ問い合わせや要請がありました。

事故後、私の人生は全く変わってしまいました。まるで人生が二分割されたかのように。すなわち、事故前の人生と事故後の人生です。事故が起こったその日は、一つの人生の終わりであり、もう一つの人生の始まりでした。

最初の数カ月は、事故の規模、影響、そして世界中に広がる波紋を把握しきれませんでした。1年後、まだあの悲劇が私の生活を支配していました。2年後、除染活動に集中しました。3年後、除染すべき範囲がようやくわかり始めました。6年後、やっと残された1号機が新しい要件を全て満たし、運転再開できることになりました。10年後、除染が完了しました。12年後、事故炉は長期保管に付されました。今はあの忌まわしい事故を忘れないための記念碑となっています。

今でもときどき、2号機に人を案内し、空っぽのタービン建屋や丸裸の制御室を見せる機会があります。見学者は運転員、管理職、政府機関や監督組織の人など、あの事故を忘れてはならない人達、次の事故につながるかもしれない事象に影響を及ぼし得る人達です。こうした人達には私は、なぜ十分すぎるほど慎重になり、想定を疑い、良好な手順書を要求し、機器を最良の状態に維持することが重要なのか考えてもらいます。

また、あの事故はヒューマンエラーによって起きたことにも触れます。単に運転員のミス、機器の故障、計器の不具合ですまされるものではありません。事故の何年も前に下された判断にも過ちがあったのです。

何を制限するか、どんな安全障壁が必要か、どのくらいの大きさで、どのくらいの長さで、どのくらいの高さで、どのくらいの強さにするかといった判断です。

誰かがこれらを判断し、それが不十分だったのです。事故が起きてもある程度の範囲内だろうと考えていたのがそもそもの間違いでした。

罪悪感や悲しみ、後悔や悼む気持ちに押しつぶされることなく、なんとか一日一日を生きながらえることができたのは、それが私だけのせいではなかったからです。運転員も機械工も技術者も、あの怪物に遭遇して一人で撃退することはできませんでした。産業界全体が故障の範囲を把握していると思い込んでいたのです。それは自己満足でした。「これで十分だろう」という態度でした。

それが私達の学んだことです。「十分」はあり得ないのです。「十分」なんてこの世にはないのです。あるのは「優れている」ことだけです。邁進するのみです。最初から到達することはないと知りながら、追い求めるのみです。優れていることが必要なのです。どんな隅でも、どんな隙間でも、全ての行動、全ての言葉に必要です。隠さない。騙さない。全てを公開する。惜しみなく協力する。飾ることなく説明責任を果たす。

これから何ヶ月も何年も、私達全員がやらなければなりません。指導者達も同じ態度でなければなりません。みんなで取り組まなければなりません。仕事をしなさい。質問に答えなさい。結果を公開しなさい。直しなさい。

簡単なことではありません。むしろ耐え難いほどに難しいことです。それでも問題を直視し、そこから学び、前進しなくてはなりません。私達は良い方向に向かっていきます。

お約束します。必ず良い方向に向かっていきます。

2011年08月